山形大学人文学部研究年報　第11号（2014. 3）27－42

徐淑詩小考
――『俄蔵敦煌文献』所収残巻をめぐって――

福　山　泰　男

はじめに

東漢後期の詩人，秦嘉・徐淑夫妻は，漢代の数少ない五言詩作家として後代にその名を残している。しかし，夫妻の名を冠した詩および書簡文は，そもそも後人の偽作ではないのか。それが真作であるとすれば，漢末・建安にいたる五言詩等の文学形成を考える上で重要な資料となる。さらに，徐淑作の兮字を中間に含む五言体の詩は，これまでも五言詩と見なしうるか疑問が呈されてきた。徐淑詩を，詩形式や作品性の面からどう評価し文学史に位置づけるべきか。

筆者は，「秦嘉の情詩について」[1]（以下前稿と称す）において，秦嘉・徐淑夫妻の作品を自作と見なしうる蓋然性について些か考証を加えた。その上で，前稿では秦嘉の五言詩を取り上げ，その情愛表現や修辞の独自性に論及した。

小論は，はじめに夫妻の往復書簡残巻を収蔵した『俄蔵敦煌文献』を新たに用い，その作品テクストについて，従来の諸本との校勘作業を施したい。その上で，夫妻の文学制作が果たした五言詩や建安文学の形成における役割を再度見直すことにする。さらに，前稿でふれなかった徐淑詩について，その五言詩形成における過渡的役割や修辞上の工夫に論及する。また徐淑詩に古詩との類似句が見えることから，漢代の無名氏による古詩の形成と，徐淑詩制作との関連をどう見るかという課題にもふれてみたい。

1　『俄蔵敦煌文献』所収の秦嘉・徐淑往復書簡残巻について

2001年，俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所・俄羅斯科学出版社東方文学部・上海古籍出版社編『俄蔵敦煌文献』[2]が出版された。同書には，後漢後期の文人夫妻，秦嘉・徐淑が交わした書簡の残巻（『俄蔵敦煌文献』第16冊，敦煌番号，Дｘ[3]12213号）が収められている。同書巻頭の「説明」によれば，『俄蔵敦煌文献』第11冊，Дｘ03600号以後の写本資料は，「学術研究の差し迫った需要に応える」ために，貴重な「大量残片」を収録したものである。秦嘉・徐淑の書簡残片はその一部であるが，伝存する諸本にはない字句が見られ，秦嘉・徐淑の作品を校訂する上で注目すべき新資料となっている。

それのみならず同残巻から，後述するように，これまでの資料では見えなかった夫妻の文学活動の新たな一面も垣間見ることができる。それは，後漢・建安の文学史に従前無かった一頁を加

えることになるであろう。

『俄蔵敦煌文献』に収載される秦嘉・徐淑の書簡残巻は，2003年に劉景雲「後漢秦嘉徐淑詩文考」[4]が，はじめてこれを取り上げた。その後，同論文をふまえた，温虎林「秦嘉、徐淑生平著作考」[5]が2007年に公表されている。両論文は，秦嘉・徐淑の文学を見る上で貴重な視座を提供する先行研究であるが，その論及には，なお新たな補足・展開の余地があるように思う。

小論はまず，敦煌番号，Дｘ12213号，秦嘉・徐淑文残巻により，既に類書等に収載された夫妻の書簡との校合をはかりたい。その上で，『俄蔵敦煌文献』を用いた上述の先行研究を補足発展させつつ，さらに別の視点から秦嘉・徐淑夫妻の詩文の文学的意義について検討を加えることにする。

『俄蔵敦煌文献』所収の秦嘉・徐淑文残巻の資料価値については，敦煌研究所刊『敦煌研究』誌上に発表された，上掲の劉景雲論文を以下に引用したい。「秦嘉・徐淑書簡は残巻であるが，残された部分は比較的欠落が少ない。……筆跡は古朴で，草卒な字体の中に秦隷の遺風が残っている。北朝時代の書写であろう。……この文献は敦煌の藏経洞出土の写本であり，文献価値は疑う余地がない。この文献の内容は，秦嘉徐淑文を伝える晋唐時期の著作より150字も多く，叙述はより整っている。これは，古文献の校勘ということから言えば，比較的高い歴史価値・文献価値を備えるものである[6]。」『俄蔵敦煌文献』所収の秦嘉・徐淑文残巻に対する文献批判の余地はなお残るであろうが，この残巻の文献価値は，劉景雲の言及するように十分肯定しうると考える。

Дｘ12213号，秦嘉・徐淑文は，現存する夫妻の往復書簡４通の内，後半の２通のみの残片である。しかし，その残片には，現存テクストにはない文言が多く含まれており，秦嘉・徐淑の作品及び文学活動の実像を知る上で，新たな手がかりを提供している。秦嘉・徐淑の書簡文は，清，厳可均『鐵橋漫稿』巻７[7]に，「後漢秦嘉妻徐淑傳」が収載される。同書は夫妻が応酬した書簡を『藝文類聚』『太平御覧』から輯佚，さらに諸書を引用し徐淑の伝記を編集したものである。前稿では，秦・徐夫妻の往復書簡４篇の内，前半の「後漢秦嘉與妻書曰[8]‥」「秦嘉妻徐淑答書曰[9]‥」の２篇を含む全４篇について，『藝文類聚』（巻32・巻73の２カ所に所収）を底本とし，『太平御覧』及び厳可均『鐵橋漫稿』により校記を施し，一部校訂を加え引用した。

小論では，『俄蔵敦煌文献』所収残巻と他の諸本との字句の異同を明示するため，往復書簡の内，秦嘉の２通目[10]と徐淑の返書[11]を掲げたい。前稿と同様に，厳可均『鐵橋漫稿』とその出典を適宜校合し，補訂を加え引用する。その上で，さらに『俄蔵敦煌文献』との校合を施したい。すなわち，諸本と『俄蔵敦煌文献』を校合することにより，秦嘉・徐淑書簡本文の増補・改訂を以下に試みる。

本文中括弧内の太字は，諸本になく『俄蔵敦煌文献』により増訂を加えた箇所である。また，諸本と異なる字は，括弧に「作…」と太字で記す。その他，『俄蔵敦煌文献』を除く諸本間の校訂については，その校異を小論末尾に注記する。以下，引用文のみ旧字体（與を与と書写する部分など『俄蔵敦煌文献』の字体はそのまま引用）とする。ただし，訓読に旧仮名遣いは用いない。

嘉重報妻書曰

車還空反，甚失所望。兼敘遠別。恨恨之情，（上欠…**如是便發**）顧有悵然。閒得此鏡。既明且好。形觀文彩，世所希有（作**當**世希有），意甚愛之。故以相與。并致[12]龍虎組緹履一緉[13]，（**及**）寶釵一雙，價値千金[14]好香四種（**種**）各一斤。素琴一張（作一**枚**），常所自彈也（作常**吾**所彈**者**）。（**歌詩十首，是吾所作。**）明鏡可以鑒形，寶釵可以耀首，好香可以馥身[15]（作**芳**香可以去**穢**），麝香可以辟悪氣[16]，素琴可以娛耳。（**輒**□□〈二字欠〉**所報之薄，不足答來贈之厚。詩人感物以興思，豈能睹此而用心乎。**□□□〈三字欠〉**意，不別爲恨。道路値信，自復致問。秦嘉報。**）

妻又報嘉書曰

（**淑再拜言，意念隆篤，薄祐受天罰苦。故復遣信。**）既惠音令，兼賜諸物。厚顧慇懃[17]，出于非望。鏡有文彩之麗，釵有殊異之觀。芳香既珍，素琴益好。（**歌詩宛約，妙**□〈一字欠〉**新聲。**）惠異物于鄙陋（作惠**示諸**物**於**鄙**賤**），割所珍以相賜（作割所珍以**見**賜）。非豐恩之厚，孰肯若斯。覽鏡執釵，（**又**）情想髣髴。操琴詠詩，思心成結。勅以芳香馥身（作勅以芳香**去穢**），喩以明鏡鑒形。此言過矣。未獲我心也（作**不**獲**妾**心）。昔詩人有飛蓬之感。班婕妤（作班**妾**）有誰榮之歎。

今君征未還，鏡將何施行[18]（作**覧**鏡將**欲**何施）。（**去穢將欲誰爲。**）素琴之作，當須君歸[19]（作**將欲**君歸）。明鏡之鑒[20]，當待君還[21]（作**將**待君**至**）。未奉光儀，則寶釵不列也（作則寶釵不**設**）。未侍帷帳，則芳香不發也（作則芳香不**陳**）。

今奉越布手巾二枚，細布韈二量[22]。嚴器中物幾具[23]。旄牛尾拂一枚，可以拂塵垢[24]。金錯椀一枚[25]，可以盛書水。琉璃椀一枚[26]，可以服藥酒。

（**是來問訊，云已能路。不別之恨，情兼來書。**□〈一字欠〉**念吾君，閒在空舍。止則獨處，無与言對。去則獨發，無有侍**□〈一字欠〉**。進登山陵，退背丘墓。恨恨之情，情亦多矣。道路雖長，往**□□〈二字欠〉**流。計度往還，勢亦不久。安不忘危，聖人之誡。頗自愛重，**□〈一字欠〉**行早止，慎所行路。歩信稽遲，恐不相及。今故**○〈一字難読〉**馬奉謝**□□〈二字欠〉**。并裁詩二編，以敘不別之苦。**□…〈以下欠〉）

嘉重報妻書曰

車環り空しく返り，甚だ望む所を失う。兼ねて遠別を叙べん。恨恨の情，（上欠…**是くの如く便ち發し，**）顧みて悵然たる有り。閒（このごろ）此の鏡を得たり。既に明らかにして且つ好し。形觀文彩，世の希に有る所（**當**世希に有り，に作る），意甚だ之を愛す。故に以て相與う。并びに龍虎の組緹履一緉，（**及び**）寶釵（ほうさい）一雙，價値千金の好香四種（**種**）各一斤を致す。素琴一張（一**枚**，に作る），常に自ら彈ずる所なり（常に**吾の**彈ずる所**の者**，に作る）。（**歌詩十首，是れ吾の作る所。**）明鏡は以て形を鑒るべく，寶釵は以て首（こうべ）を耀かすべく，好香は以て身を

馥(かお)らすべく（**芳**香は以て**穢れを去る**べく，に作る），麝香は以て悪気を辟くべく，素琴は以て耳を娯しますべし。(**輒ち□□**〈二字欠〉**報ゆる所の薄きは，來贈の厚きに答うるに足らず。詩人は物に感じて以て思いを興し，豈に能く此れを睹て心を用いんや。□□□**〈三字欠〉**意は，別れざるを恨みと爲す**[27]**。道路信に値い，自ら復た問を致す。秦嘉報ゆ。**）

妻又報嘉書曰

（**淑再拝して言う，意念は隆く篤く，薄祐にして天罰の苦を受く。故に復た信を遣る。**）既に音令を恵まれ，兼ねて諸物を賜う。厚顧慇懃は，望みに非ざるに出づ。鏡に文彩の麗有り，釵(かんざし)に殊異の觀有り。芳香既に珍しく，素琴益ます好し。(**歌詩宛約，妙□**〈一字欠〉**新聲**。）異物を鄙陋に恵み（**諸**物を鄙**賤**に恵**示し**，に作る），珍とする所を割きて以て相い賜う（珍とする所を割きて以て賜**る**，に作る）。豐恩の厚に非ざれば，孰(たれ)か肯えて斯くの若からん。鏡を覧て釵(かんざし)を執り，（**又**）情想髣髴たり。琴を操り詩を詠じ，思心は結を成す。勅(いまし)むるに芳香の身を馥(かお)馥らすを以てし（勅(いまし)むるに芳香の**穢を去る**を以てし，に作る），喩すに明鏡の形を鑒(かんがみ)るを以てす。此の言過てり。未だ我が心を獲ざるなり（**妾**が心を獲ず，に作る）。昔詩人に飛蓬の感有り。班婕妤（班**妾**，に作る）に誰栄の歎有り。

今君往きて未だ還らず，鏡は將に何をか施行せん（鏡を**覧て**將に何をか施さんと**欲せんとす**，に作る）。(**穢を去りて將に誰にか爲さんと欲せんとす**。）素琴の作すことは當に君が歸るを須つべし（**將に**君が歸ることを**欲せんとす**，に作る）。明鏡の鑒ることは，當に君が還るを待つべし（**將に**君が**至る**を待たんとす，に作る）。未だ光儀を奉ぜざれば，則ち宝(ほうさい)釵列ねざるなり（則ち寶釵**設け**ず，に作る）。未だ帷帳に侍せざれば，則ち芳香發せざるなり（則ち芳香**陳べ**ず，に作る）。

今越布の手巾二枚，細布の韈(べつ)二量を奉ず。嚴器中の物幾んど具わる。旄牛(ぼうぎゅう)の尾の拂一枚，以て塵垢を拂うべし。金錯の椀一枚，以て書水を盛るべし。琉璃の椀一枚，以て藥酒を服すべし。

（**是に來たりて問訊し，云に已に路を能くす。別れざるの恨み，情は兼ねて來書す。□**〈一字欠〉**吾が君を念い，間かに空舎に在り。止むれば則ち獨り處り，与に言對する無し。去れば則ち獨り發し，侍□**〈一字欠〉**有る無し。進みて山陵に登り，退きて丘墓に背く。恨恨の情，情亦た多し。道路長きと雖も，往□□**〈二字欠〉**流。往還を計度するに，勢い亦た久しからず。安きにいて危きを忘れざるは，聖人の誡めなり。頗る自ら愛重せよ，□**〈一字欠〉**行早く止め，行く所の路を慎め。歩は信に遅きを稽え，相い及ばざるを恐る。今故○**〈一字難読〉**馬奉謝□□**〈二字欠〉**す。并びに詩二編を裁し，以て別れざるの苦しみ[28]を叙べん。□…**〈以下欠〉**）

２　『俄蔵敦煌文献』による秦嘉・徐淑書簡の増補・改訂結果から見えるもの

以上第１節では，厳可均『鐵橋漫稿』所収「後漢秦嘉妻徐淑傳」および諸本を校合した上で，さらに『俄蔵敦煌文献』所収秦嘉・徐淑書簡残巻により，従前の秦嘉・徐淑書簡に増補を施した。小論で校訂・増補したテクストは，同残巻を資料に用いた秦嘉・徐淑研究の先行論文二編（劉景雲・温虎林両氏による）における引用文と，文字の判読に若干の違いがある。さらに小論は，既存の諸本になく同残巻により新たに増補しうる文言に対し，先行二論文とは異なる観点から，以下検討を進めたい。

劉景雲[29]は，従前のテクストにない字句を多くもつ同残巻について，その文献価値を高く評価している。また，同残巻により，秦嘉・徐淑往復書簡の文意がさらに整い，文章のつながりが自然で，夫婦の情意がきめ細かく思いやりに富んだ描写になったと説いている。

温虎林[30]は，劉景雲の論及をふまえて同残巻の資料価値を評価するとともに，増加部分の字句中，夫婦がともに詩歌を贈答する叙述「**歌詩十首，是れ吾の作る所**」「**詩人は物に感じて以て思いを興し，豈に能く此れを睹て心を用いんや。**」等に注意をはらう。さらに徐淑が秦嘉の贈詩に対し，「**歌詩宛約，妙□**[31]〈一字欠〉**新聲。**」と評価した一節，さらに「**幷びに詩二編を裁し，以て別れざるの苦しみを叙べん**[32]**。**」という記述に着目する。

温虎林は，これらに対し次のように二点にわたり考察しており，そのまま引用したい（太字は小論筆者）。①「徐淑が秦嘉の贈詩に与えた評語「**宛約**」は，「詩評理論上，“婉約”の祖であり，「**幷びに詩二編を裁し…**」の部分は，徐淑自身の答詩について言及している。」②「両人の贈答詩は現存する数に止まらず，その中の数首が『玉臺新詠』に採用され世に伝えられたに過ぎない。現存する東漢の無名文人の五言贈答詩中には，必ず秦嘉・徐淑の作品が含まれるだろう。」

温虎林は，『通渭県志』の「秦嘉徐淑夫妻は二百首以上の詩を残したと伝えられるが，今流伝するものは極めて少ない[33]。」という記述を引き，それを裏付ける資料の一部として『俄蔵敦煌文献』所収残巻を引く。しかし『通渭県志』は史実を示す出典を明示せず，史料の精度に欠ける。現今，夫妻の詩作が『玉臺新詠』等で伝えられるものより多いことを示唆する唯一の史料は『俄蔵敦煌文献』所収残巻のみである。

温虎林の論及において注目されるのは，徐淑の発言に後の「詩評」の萌芽を見ている点である。ただ残念なことに，温虎林は，徐淑が秦嘉の詩を「**宛約**」と評したことについて，宋詞の風格の一面を示す「婉約」の源流と結論づけるに終わっている。「**歌詩宛約，妙□**〈一字欠〉**新聲。**」等の新たに示された『俄蔵敦煌文献』残巻の文言は，詩評理論に論点を絞らず，後述するように，むしろ後漢末建安にいたる文学形成の射程でその意義を再確認できるのではないだろうか。さらに，秦嘉・徐淑の作品が，古詩を含む現存の東漢無名文人による五言贈答詩として誤って流伝していると言う温虎林の推察も，なお多くの説明を要する。

『俄蔵敦煌文献』残巻に新たに見出された秦嘉・徐淑のテクストを再検討してみよう。夫秦嘉

の書簡は，数量の記載を伴う贈品目録のように「**當**世希に有」る「鏡」「龍虎の組緹履一緉」「寶釵(ほうさい)一雙，價値千金の好香四種（**種**）各一斤」「常に**吾の**彈ずる所**の者**」の「素琴一**枚**」と同列に並べる中で「**歌詩十首**」と記している。これは，自作の詩を妻に贈り，贈品の数々と同じように，それを妻に欣賞してもらいたいという願望の表れであろう。

徐淑は夫への返書で，賜り物に対し，「鏡に文彩の麗有り，釵(かんざし)に殊異の觀有り。芳香既に珍しく，素琴益ます好し。」と賞でる。それと並べて，受け取った「**歌詩十首**」に「**歌詩宛約，妙□**〈一字欠〉**新聲**。」と述べるのは，夫が願望するように，歌詩を，他の貴重な贈り物と一緒に味わい愛でているからであろう。さらに徐淑は秦嘉の詩を，濃やかな作風（「**宛約**」）や新しさ（「**新聲**」）が備わると評す。この発言は作品に対する短い文学批評と言える。妻は最後の部分で，「**并びに詩二編を裁し，以て別れざるの苦しみを叙べん**。」とも記す。秦嘉・徐淑は，先述したように，詩について，読者（受け手）が欣賞・鑑賞しうる作品と認識する一方，ここでは，作者・読者共有の「**別れざるの苦しみ**」（徐淑），「**別れざるを恨みと爲す**」（秦嘉）真情を述べる表現と捉えている。秦嘉・徐淑は，各々作者と読者を兼ね，共通の文学空間を作っていると言えよう。

さらに「**詩二編**」という記載は，徐淑の現存する（兮字をともなう）五言詩以外の詩が存在したことを示している。夫婦二人の詩歌制作が，書簡を応酬する時のみに限られていたことは考えにくい。だとすれば，「**詩二編**」「**歌詩十首**」と記される以上に，秦嘉・徐淑夫妻は，普段から相当数の詩を制作し応酬していた可能性もある。

『俄蔵敦煌文献』に所収されるのは，夫婦の書簡それぞれ二通目の残巻に過ぎない。しかしそこから，互いの真情を詩文で表現し応酬する関係や，詩歌を相互に欣賞する姿勢，さらには夫婦対等の立場で行われる一種の批評行為が窺えよう。夫婦二人だけの関係にすぎないが，秦嘉・徐淑は相互に作者と読者を兼ね，創作・鑑賞・応酬・批評を行う一種の文学サークルをともに形成したとも言えよう。しかも夫婦とも，後漢後期において主要な様式になり得ていない五言徒詩を制作している。

このように見てくると，夫婦の詩作は，文学史において改めて重要な位置づけが可能になることがわかる。秦嘉・徐淑の後，後漢末・建安文学は，詩壇とも呼ぶうる詩人グループが登場し，作品応酬・文学批評・五言詩等の創作が行われた。そこには，共通の文学趣味や作品を贈り欣賞しあう関係，詩人同士の感情の共有があった。このような建安の詩人集団による文学活動は，構成員の多寡に違いがあるにせよ，秦嘉・徐淑二人によるそれと近接している。

以上要するに，①相互応酬②作品鑑賞・欣賞③作品批評④五言詩制作の四点において，秦嘉・徐淑の文学活動は，建安文壇の諸特徴をすでに具備しており，文学史において先駆的意義をもつと言える。『俄蔵敦煌文献』残巻を資料として用い再検討した結果，後漢，桓帝期の秦嘉・徐淑は，従前の文学史が示す以上に，後漢末建安文学形成に連なる重要な作家であることが再発見できよう。

3　徐淑の中間兮字型五言詩について

前節では，『俄蔵敦煌文献』残巻から秦嘉・徐淑の文学活動の新たな一面を見出した。ここではさらに，その詩本文について検討したい。前稿ですでに秦嘉の五言詩について，性差の観念を打ち破るような情詩としての独自性や，メトニミー（換喩）を活用した修辞の特質等を考察した。小論では，妻徐淑の，中間に兮字を含む現存五言詩について言及したい。前節で見たように，徐淑は短い文言ながら，夫の作品に対し文学批評を施している。現存する徐淑の書簡は夫に倍する分量を有し，前稿で述べたように，古典を引用しつつ理知的で精彩に富んだ表現に特徴がある。さらに夫の五言詩制作は，妻徐淑という読者・批評者がいてはじめて成立したことを考えるならば，文学者としての徐淑は重い存在であったと言えよう。また漢代における女性の創作という視点から見ても，なお無視できぬ詩人である。小論は，前稿の続編という位置づけから，徐淑に着目したい。

ここで，行文上前稿の記述と一部重複するが，徐淑に関する従来の言及を見ておきたい。

詩人としての秦嘉・徐淑は，つとに南朝梁の鍾嶸『詩品』において，漢代の代表的五言詩作家として中品に選ばれている。鍾嶸『詩品』の記述は次のようであるが，現存の兮字を含む五言詩を見る限り『詩品』の徐淑評には疑問が残る。

> 士會夫妻事既可傷，文亦凄怨。爲五言者[34]，不過數家，而婦人居二。徐淑叙別之作，亞於團扇矣[35]。
>
> 士會夫妻の事既に傷むべく，文も亦た凄怨。五言を爲る者は數家に過ぎず，而して婦人二を居む。徐淑の叙別の作は，團扇に亞ぐ。

鍾嶸の記述には大きく二点の疑問がある。①夫妻を対等に選び入れながらも，漢代五言詩における女性詩人の比重に注目し，徐淑に論評を加え，班婕妤に次ぐ作家であると述べる。しかし，班婕妤の五言詩については，つとに真偽を疑われている[36]。②現存する徐淑詩は，「○○兮○○」の句からなる一首のみであり，しかも漢魏前後の五言詩にこのスタイルは他に見いだせない[37]。

①に関連し，現今の文学史書は，徐淑よりむしろ秦嘉の五言詩に着目している[38]という事実がある。疑問点の②に関して，許文雨『文論講疏』は，「…他家の五言當時固より未だ此の種有らざるなり。…但頗（や）や疑う淑に本集一巻有り，已に佚す，其の中當に五言詩有るべきかと。(…他家五言當時固未有此種也。…但頗疑淑本有集一巻，已佚，其中當有五言詩歟。)」と述べている[39]。許文雨が，兮字を含む徐淑の現存する詩は当時の一般的五言型ではないと言うように，徐淑詩を五言詩史に置くことに疑問を呈する声は多い。現存の徐淑詩について，鄭賓于『中国文学流変史』は，兮字は「代声」であり四言詩作品と捉える[40]。章培恒・駱玉明主編『中国文学史』は，「騒体と通行五言体の混合」と見る[41]。亀山朗は「実質的には四言と考えられる」と説いてい

る[42]。

後に全文掲げるような，徐淑による「○○兮○○」の句型で一貫した五言型をどう捉えるべきか。鈴木修次は，「この作品は，四言詩を楚辞風のリズムにならわせるもの[43]」と述べているが，この特殊なリズムに関して，松浦友久『中国詩歌原論』はより具体的に論及しておりここで参照したい[44]。松浦は，「五言の詩句は，おそらくまず，四言句の変型として個別的に発生した。」と述べ，以下のように『詩経』の四言詩型に五言句が混在する例を挙げる。

例えば，「在南山之側」（召南「殷其靁」）「昔育恐育鞠」（邶風「谷風」）等は，①「四字句の上に一字を加えたもの」。「俟我於城隅」「匪女之爲美」（邶風「静女」）等は，②「句中に一字を加えたもの」。「旄丘之葛兮」（邶風「旄丘」）「維其有章矣」（小雅「裳裳者華」）等は，③「句末に一字を加えたもの」である。

松浦は，中国詩のリズムについて，「一字一音」の「音節のリズム」を基礎としてその上に「二字一拍」の「拍節のリズム」が「律動している」と説いている。この場合四言詩は，（○○）＋（○○），（○○）＋（○○）…という二拍（括弧は一拍）の連なりになり，「二字一拍の二拍子が基調」である。五言詩の句は，○○＋○○○のように二字＋三字に二分されるが，（○○）＋（○○）＋（○×），（○○）＋（○○）＋（○×）…というように（句末第五字の後の×は休拍），「三拍子が基調」になる。このような四言・五言の詩的リズムをふまえると，松浦が説くように『詩経』の四言詩句中に混在する五言詩句は，特に上掲の②③の場合のように，四字句に「於・之・兮・矣…」等の虚詞を加えたものに留意すべきである。松浦は，この場合，五言詩句中の虚詞は，「第一拍か第二拍に軽く添えて四言句と同様に読まれることが多かった」と考察している。

松浦の中国詩のリズムに関する所説を援用すれば，「○○兮○○」の句型で一貫する，現存の徐淑詩は，中間の兮字が軽く読まれ，全体が二拍のリズムで連ねられる四言詩と同様に見ることが妥当であろう。このように徐淑詩は，句末に休拍を伴い三拍子のリズムをもつ一般の五言詩とは隔たりがあると言えよう。さらに松浦が述べるように五言詩の発生を，虚詞一字を付加した「四言句の変型」という角度から捉えるならば，徐淑の「○○兮○○」型五言は，四言詩から五言詩への変移の過程にもたらされた句型と見なすことができる。これまでの認識は，兮字を含む五言の徐淑詩をおよそ四言詩と断じていたが，先に引いた章培恒・駱玉明主編『中国文学史』が，徐淑詩を「騒体と通行五言体の混合」と述べるのは，むしろ客観的な説明と言えよう。ただ「混合」というのはやや曖昧な言い方である。松浦の言う，「五言の詩句は，おそらくまず，四言句の変型として個別的に発生した。」との見方をふまえつつ，新たに説明を加えるとすれば，兮字を含む五言句型をもつ徐淑詩は，「通行五言体」にいたる以前の過渡的形式と捉えるべきであろう。

ここで，『俄蔵敦煌文献』残巻を再度見てみよう。徐淑は「**并びに詩二編を裁し**」と述べていたから，夫秦嘉への贈詩は，現存の一首以外，少なくとも一首は存在したと考えられる。秦嘉は

五言詩以外に四言詩も伝わっているから，妻徐淑がそれに呼応するように兮字を含まぬ通常の四言詩を制作したことはありえよう。また，先に引いた許文雨『文論講疏』が言うように，散逸した徐淑集の中に，現存の兮字付き五言体以外の五言詩が含まれていた可能性も否定できない。徐淑が秦嘉の五言詩に対応するような五言詩型を残していた可能性もある。いずれにせよ，「**詩二編**」という言葉から，複数に及ぶ徐淑の詩作それ自体に，以下のような詩形式の発展経路を見出すことができよう。○徐淑詩の（佚した）別の一首が四言詩の場合：四言詩→現存の兮字付き五言体。○徐淑詩の（佚した）別の一首が五言詩の場合：現存の兮字付き五言体→五言詩。

また，文学史の射程から言えば，後漢の五言詩形成過程において，徐淑の現存兮字付き五言体は，五言詩にいたる橋渡し的・過渡的形式であったと結論づけられよう。

楚辞の五言句型と徐淑詩との関連はどうか。陳本益『漢語詩歌的節奏』は，『楚辞』「九歌」の「鳥次兮屋上，水周兮堂下。」（「湘君」）「成禮兮會鼓，傳芭兮代舞。」（「禮魂」）等の句を挙げ，これらは『詩経』の四言詩に兮字を加え発展したと説いている[45]。陳本益は，先に引いた松浦と同様に，『詩経』の四言体→騒体の五言体という発展経路に言及し，興味を引く。

ただし，徐淑詩との直接の比較から取り上げるべき『楚辞』中の五言句は，「九歌」ではなく，王逸の「九思」怨上・憫上・悼乱・哀歳であろう。それらは，一部ではなく徐淑詩のように連続して「○○兮○○」の句型を用いている。それでは，中間に兮字をもつ徐淑詩は，同型の五言句を長く連ねる「九思」に学んだものか。王逸は，安帝，元初中（114～119）の校書郎であり，桓帝（147～167）時代の人とされる[46]秦嘉・徐淑以前に活動している。したがって，徐淑が王逸「九思」を目にしえたことは疑いない。しかしながら，「九思」は，屈原を悼みその忠節の志を頌えた作品であり，夫への情愛を詠う徐淑詩とは，内容に重なる点がない。修辞においても，「令尹は謷謷，羣司は譨譨たり。哀しいかな淈淈として，上下とも流れを同じくす。菽藟は蔓衍し，芳蘺は挫け枯る。…（令尹兮謷謷，羣司兮譨譨。哀哉兮淈淈，上下兮同流。菽藟兮蔓衍，芳蘺兮挫枯。）…」（「怨上」）のように，重言を多用し象徴的な表現にとどまる。徐淑が，『楚辞』「九歌」の一部や「九思」を目にし，中間に兮字を有する五言体のリズムを学んだであろうことは否定できまい。しかし後述するように，徐淑詩は，内容・修辞において「九思」と異なる独自の工夫を凝らしているのである。

なお付言すれば，この兮字を含む五言の句型を連ねる楚辞体の詩賦は珍しく，同じく中間に兮字を含む七言体は，項羽「垓下歌」，漢，高祖「大風歌」等や，徐淑より少し前の張衡「定情賦」の「歎」・「舞賦」の「歌」等，詩歌や賦中の歌に散見する。しかし，詩賦とも兮字を含む五言体を連ねる形式は，徐淑詩や王逸「九思」以外，ほぼ見ることができない。その意味では，詩型自体の独自性に徐淑詩の特徴があると言えよう。

次節では，徐淑詩の本文に即してその表現上の特質を少し考察してみたい。

4　徐淑詩本文に関する若干の考察

秦嘉妻徐淑

答詩一首[47]

妾身兮不令　妾が身の令(よ)からず
嬰疾兮來歸　疾(やまい)に嬰(かか)りて來たり歸る
沉滯兮家門　家門に沉滯し
歷時兮不差　時を歷て差(い)えず
曠廢兮侍覲　侍し覲るを曠(むな)しく廢し
情敬兮有違　情敬は違う有り
君今兮奉命　君今命を奉じ
遠適兮京師　遠く京師に適く
悠悠兮離別　悠悠離別し
無因兮敍懷　懷いを敍すに因(よ)し無し
瞻望兮踴躍　瞻望して踴躍し
佇立兮徘徊　佇立して徘徊す
思君兮感結　君を思い感結び
夢想兮容輝　容輝を夢想す
君發兮引邁　君發して引き邁き
去我兮日乖　我を去り日びに乖く
恨無兮羽翼　恨むらくは羽翼の
高飛兮相追　高く飛ぶて相い追う無きを
長吟兮永歎　長吟して永歎し
淚下兮霑衣　淚下りて衣を霑す

鈴木修次は，上掲の表現技巧について，「実質的に四言詩のそれに従うものであるが」，「『詩經』の作品にしばしば用いられた畳語はなく，軽快であり，流動性をもつ[48]。」と評している[49]。この批評はやや説明不足ではあるが，その妥当性は，次に引く秦嘉の四言詩と比較することで理解できよう。「曖曖たる白日，曜(ひかり)を引きて西に傾く。啾啾たる雞雀，羣飛して楹(はしら)に赴く。皎皎たる明月，煌煌たる列星。(曖曖白日，引曜西傾。啾啾雞雀，羣飛赴楹。皎皎明月，煌煌列星。)…[50]」(秦嘉「贈婦詩一首」)。この秦嘉の四言詩は，全体に畳字を多用し，重く緩慢なリズムで一貫しており，徐淑詩とは対照的である。

鈴木が言う徐淑詩の「軽快」さ「流動性」について，少し考察，補足してみたい。徐淑詩は，叙事的な前半10句と抒情的な後半10句とに前後大別できよう。前半は，病身のため一人離れ暮ら

し，さらに都へ赴任する夫との遠別を迎える境遇の変移を，時系列に沿い述べ連ねる。この前半部分の表現は，出来事を並べ列ね，停滞感のない流れるような叙述である。対照的に後半10句は離れ去る夫への思慕を描くが，「君を思う」「感結ぶ」「長吟し永歎し」「涙下る」という抒情表現はむしろ比重が小さい。それ以外，「瞻望」「踴躍」「佇立」「徘徊」という動詞，夫婦の隔たりを述べる「君發して引き邁く」「我を去り日びに乖く」という動的表現，さらに「高く飛ぶて相い追う」「羽翼」という形象が，後半部分に流動感をもたらしていると言えよう。

前述したように，徐淑詩は，四言詩から五言詩への過渡的形式と見なしうる。『詩経』や秦嘉の四言詩との比較からも，徐淑詩が四言詩のもつ単調さや冗長さを脱却していることが見て取れる。さらに，以上簡単に見たような修辞面の工夫が，この詩全体に「軽快」「流動性」といった特徴をもたらしていると言えよう。このような修辞は，中間の兮字をとり，「妾身不令，嬰疾來歸。沉滯家門，歴時不差。…恨無羽翼，高飛相追。長吟永歎，涙下霑衣。」と通常の四言詩に変えて見ても，その効果があまり減じない。ただし，徐淑の五言体は，兮字が単調な繰り返しに陥っていないように思う。むしろ兮字が連綴されることによって，上記のような快速感のある叙述に，なお軽快なテンポが加わっていると考えられよう。

前稿で検討した秦嘉の五言情詩は，伝統的な性差の観念を越えた叙述や，女性に隣接するものを執拗に描くメトニミーにおいて独自性を示していた。徐淑の五言体「答詩」は，形式において四言詩から通常の五言詩に向かう過渡的形式であるとともに，同一形式の詩歌が漢代に見られぬことから，徐淑独自の実験的形式であったと言いうる。松浦の説く五言詩本来の「拍節のリズム」（三拍子）に劣る徐淑詩は，以上の考察から，形式のみならず修辞においても，秦嘉詩等の（兮字を含まぬ）五言詩とは異なる，新たな実験をそこに試みたと言えよう。このことは，『俄蔵敦煌文献』所収残巻により増補された徐淑文において，秦嘉詩を「**宛約**」「**新聲**」と評した，徐淑の一種の文学観からも理解できよう。徐淑は自身の詩においても，「**新聲**」と呼びうるような創作価値を追求したのである。

徐淑詩の特質に関し以上些か検討したが，最後にこの詩が提示する課題についてふれたい。この詩の後半部分は，上述のような修辞上の工夫が見えるとはいえ，『詩經』『楚辭』「古詩」中の語句が使用され類型表現が目立つことも事実である。11・12句目は『詩經』邶風，燕燕の「瞻望して及ばず，佇立して以て泣く。(瞻望弗及，佇立以泣。)」をふまえ，13句目の「君を思い」云々は，『楚辭』九辯に「豈に鬱陶して君を思わざらんや（豈不鬱陶而思君兮）」とあるほか『楚辭』に散見する。このような古典を下敷きにした句作りとは別に，ここで問題にしたいのは，14・17・18・20句目と「古詩十九首」中の句との次のような類似関係である。「古詩十九首」第十六首「夢想見容輝」：徐淑「答詩」14句目「夢想兮容輝」，第五首「願爲雙鳴鶴，奮翅起高飛。」：17・18句目「恨無兮羽翼，高飛兮相追。」，第十九首「涙下沾裳衣」：20句目「涙下兮霑衣」。以上対照させると，17・18句目は，それぞれ相似するモチーフを用いるが，14・20句目は，「古詩十九首」の句とほぼ同一表現となっている。

このことについて，柳川順子は，徐淑詩は上記のような古詩の句を引用していると述べ，古詩の成立時期を徐淑以前（柳川は後漢，安帝・順帝期の成立と推論する。）と判断している[51]。ただ柳川は一方で，「夢想見容輝」の句を含む「古詩十九首」第十六首「凜凜歳云暮…」は，「離別した夫と夢の中で再会する女性を主人公」とし，徐淑詩のモチーフと類似することに言及している。柳川は，その場合，「徐淑詩を洗練させ，普遍化して成ったのが『凜凜歳云暮』詩である可能性もないとは言えない。」とも論じる。

古詩の成立時期については，なお多く検討の余地があろう。徐淑詩と古詩の先後関係をどう見るかは，徐淑「答詩」後半部が提起する別の課題とし，今後に残しておきたいと思う。

結　　語

前稿では，後漢末，蔡邕と同時代の人と考えられる趙壹と，桓帝期の秦嘉との類同性にふれた。秦嘉と趙壹はともに上計で，後漢末に先駆的な五言徒詩を残した点で共通する。さらに桓帝期の人と伝えられる秦嘉は，趙壹と活動時期にそれほどの隔たりがない。また秦嘉は隴西，趙壹は漢陽と，ともに甘粛省の隣接する郡の人である。上計という役職，さらにそれを共通項として，ほぼ同時代同地域の趙壹を参照することは，秦嘉の文学を理解する上で意義がある。趙壹は，「刺世疾邪賦」という賦の中に，士大夫個人の窮達を述べる「秦客」「魯生」の五言詩二首を詠んでいる。士人の五言詩が，賦と同じように士人一個の内面を表白する様式となっていく上で，趙壹詩は文学史上先駆的意義がある[52]。

一方，秦嘉・徐淑は，書簡に添えて徒詩（五言詩および過渡的形式の五言体）を応酬した。趙壹による賦中の五言詩と，秦嘉・徐淑による書簡付きのそれは，楽府や歌謡とは異なる徒詩五言詩の形成を考える上で意義があろう。秦嘉・徐淑と趙壹は，賦や書簡のようなエクリチュールの一環として，手で書き目で読む詩歌を制作したのである。知識人が手ずから五言詩作品を書写・制作した点で，三者は，文学史に大きな足跡を残していると言える。

さらに小論は，『俄蔵敦煌文献』所収の秦嘉・徐淑往復書簡残巻に新たに見出された文言から，夫妻の文学が，五言詩作品の応酬・欣賞・批評において建安詩壇に連接する先駆性をもつことに論及した。

最後に五言体の徐淑詩が，四言詩から五言詩への過渡期的形式であること，その詩の表現上の特性について考察した。徐淑詩に見える古詩との類似句をどう考えるか。徐淑詩が古詩を引用したのか，あるいはその逆か。この課題は，東漢後末期の詩史を捉える上で大きな意味をもつだけに，なお慎重な考察を重ねていくべきであろう。

註

1　『山形大学人部学部研究年報』第10号，2013。

2　上海古籍出版社・俄羅斯科学出版社東方文学部，2001。

3　敦煌 Dun huang のロシア語音写による略号。

4　『敦煌研究』第78期，2003。

5　『甘粛高師学報』第12巻第３期，2007。

6　注４前掲書，88頁。

7　東北大学付属図書館・狩野文庫所蔵『鐵橋漫稿』八巻（甲Ｃ・２・53）巻８「後漢秦嘉妻徐淑傳」33葉右～36葉右。

8　『藝文類聚』（中文出版社，1980）巻32，571頁「後漢秦嘉與妻書」。

9　『藝文類聚』巻32，571頁「秦嘉妻徐淑答書」。

10　『藝文類聚』巻32「嘉重報妻書」571頁。

11　「‥‥則芳香不發也」まで，『藝文類聚』巻32「妻又報嘉書」572頁。「今奉越布手巾二枚‥‥（末尾）」が，『藝文類聚』巻73「秦嘉妻與嘉書」1263頁。

12　依『鐵橋漫稿』有二字「并致」。

13　『藝文類聚』脱七字，依『太平御覧』（中華書局，1960）巻697（3111頁）。

14　『藝文類聚』脱四字，依『太平御覧』巻718（3182頁）。

15　「馥身」，『太平御覧』『鐵橋漫稿』作「去穢」，依『藝文類聚』巻32（571頁）改。

16　『藝文類聚』脱一句，依『太平御覧』巻981（4345頁）。

17　『鐵橋漫稿』作「殷勤」，依『藝文類聚』巻32（572頁）改。

18　『藝文類聚』脱二句，『鐵橋漫稿』脱「行」字，依『太平御覧』巻717（3179頁）。

19　『鐵橋漫稿』脱二句，依『藝文類聚』巻32（572頁）。

20　「之鑒」，『太平御覧』『鐵橋漫稿』作「鑒形」，依『藝文類聚』改。

21　「還」，『太平御覧』『鐵橋漫稿』作「至」，依『藝文類聚』改。

22　『藝文類聚』脱二句，依『太平御覧』巻716（3176頁）。「二量」，『鐵橋漫稿』作「一量」，依『太平御覧』（同）改。

23　『藝文類聚』脱一句，依『太平御覧』巻717（3180頁）。

24　『藝文類聚』脱二句，依『太平御覧』巻703（3138頁）。

25　「椀」，『鐵橋漫稿』作「盌」，依『藝文類聚』巻73（1263頁）。

26　「椀」，『鐵橋漫稿』作「盌」，依『藝文類聚』巻73（1263頁）。

27　「**不別爲恨。**」は読みにくいが，「**別れざるを恨みと爲す。**」と訓読し，離別することができずに恨みに思うと解した。この部分の「**不別**」は「別たず」とも訓読しうるが，分け隔てる・分離することができないという意味で用いられる。用例は，「法家不別親疏，不殊貴賤。」（司馬談「論六家要指」），「湛湎于酒，君臣不別，禍在內也。」（『漢書』五行志）等々。

28　徐淑の書簡引用部分末尾の「**不別之苦**」という部分は，秦嘉の書簡引用部分最後の「**不別爲恨。**」と同様の表現である。妻は夫の発言をふまえ，それに呼応するように「**別れざるの苦しみ**」＝別離できない苦しみ，と表現したのであろう。注27参照。

29　注４前掲書。

30　注５前掲書。

31　温虎林は，この欠落文字について「**妙語**」と推測している。

32　温虎林は，「**以叙不別之苦**」について，「**不別**」は「分別」の誤字かと説くが，誤りであろう。この点は，注27・28参照。

33　『通渭県志』（蘭州大学出版社，1990）679頁。

34　曹旭『詩品集注』（上海古籍出版社，1994）中（198頁）は，「二漢爲五言者」とし，「校異」において姚寛『西溪叢語』等の『詩品』の引用により「二漢」を付加すべきことについて考証する。一方，高木正一訳注『鍾嶸詩品』（東海大学出版社，1978）は，車柱環『鍾嶸詩品校證補』の説にもとづき，『西溪叢語』が「二京」（「二漢」の誤引）の字を「爲」の上に付加したのは誤りであるとする。『詩品』の序・本文より，「二漢」が無くとも，この条は漢代の五言制作者を述べていることが自明であることを理由とする。203頁。ここでは『詩品集注』が「二漢爲五言者」と作ることの是非について判断を保留し，「二漢」の字を加えない。

35　曹旭『詩品集注』中，197頁。

36　『文心彫龍』明詩篇等の記述による。

37　この二点以外にも，秦・徐に関する『詩品』の記述には様々な疑義が残る。陳延傑注『詩品注』（人民文学出版社，1958）が，「秦嘉夫妻詩，皆未著其源流者，又一例焉。」（巻中，21頁）と指摘するように，鍾嶸『詩品』は，他の詩人をすべて「其源出於～」と評するが，両詩人についてはその源流を述べない。

38　陸侃如『中国詩史』（中華書局，1956）は，秦嘉詩を五言詩の起源と見なす。268頁。游国恩等主編『中国文学史』（人民文学出版社，1963），中国社会科学院文学研究所中国文学史編写組『中国文学史』（人民文学出版社，1985）は徐淑にふれず秦嘉のみ取り上げる。前者は，第一冊，第二編「秦漢文学」第五章「五言詩的起源和発展」第二節「東漢文人的五言詩」，210頁。後者は，第一冊，「秦漢文学」第六章「五言詩的成長」第一節「五言詩的興起和成長」204頁。

39　正中書局，1976，218頁。高木正一訳注『鍾嶸詩品』は，許文雨の見解を補足し，『文選』巻五十五に収録される劉峻「廣絶交論」の李善注に「秦嘉婦詩曰…」として引く二句を，亡佚した徐淑の詩と推定するが，これは李善注の誤引である。この二句は『玉臺新詠』が収録する秦嘉「贈婦詩」第三首中の句であり，李善注の「秦嘉婦詩曰…」は，「婦」の字を取る必要がある。

40　中州古籍出版社，1991，第三章「詩的再造時期」第一節「両漢的徒歌」二「論三言四言五言六言七言詩的継起」B「四言」，237頁。

41　復旦大学出版社，1996，上巻，第二編「秦漢文学」，第五章「東漢中期至后期的詩賦与散文」278頁。

42　「秦嘉『贈婦詩』の漢代詩としての新しさ」（『高知大国文』19，1998）７頁。

43 『漢魏詩の研究』（大修館，1967）第１章「楚歌・新聲考」第１項「楚風の詩歌の系譜」59頁。

44 大修館書店，1986，第二部「中国古典詩のリズム」129～140頁。

45 文津出版社，1984，144頁。

46 『太平御覧』巻400「人事部」41「凶夢」所引「幽明録」の記述による。中華書局，1960，1850頁。

47 呉兆宜注，穆克宏點校『玉臺新詠箋注』（中華書局，1985）巻１，32頁。

48 注43前掲書。60頁。

49 注41前掲書は，徐淑詩について「通俗易曉和真摯流暢的特徴」（278頁）と印象批評を加えているが「流暢」という評語は鈴木の考察と重なっている。

50 『玉臺新詠箋注』巻９，396頁。

51 『漢代五言詩歌史の研究』（創文社，2013）第４章「後漢時代における古詩の伝播とその展開」247・248頁。

52 趙壹については，拙著『建安文学の研究』（汲古書院，2012）第二章「趙壹の詩賦について」参照。初出は，『集刊東洋学』第64号，1990。

徐淑詩小考

—圍繞《俄藏敦煌文獻》所收殘卷—

福　山　泰　男

東漢桓帝時期的秦嘉、徐淑夫妻，被後代評價為漢代重要五言詩作家。夫妻二人的作品如果不依照後代的假託，認定為是真作的話，它將是考察漢末建安時期五言詩等文學作品形成的重要資料。筆者已經在《關於秦嘉的情詩》一文中，對東漢後期的秦嘉、徐淑夫妻的作品的真實性進行了若干考證，并在此基礎上，對丈夫秦嘉的五言詩中的情愛、女性表現等特性進行了考察。本論文將全新利用收錄有夫妻往來信件殘卷的《俄藏敦煌文獻》，對秦嘉、徐淑二人的詩文進行再次校對。并在此基礎上，對夫妻的文學創作在五言詩和建安文學的形成中扮演的角色進行再發現。此外，關於上一篇論文中沒有觸及的徐淑的含有“兮”字的五言詩，本文也將對其形式上和修辭上的特性嘗試進行再檢討。

2001年，俄羅斯科學院東方研究院東方研究所聖彼得堡分所·俄羅斯科學出版社東方文學部·上海古籍出版社編纂的《俄藏敦煌文獻》出版，书中收載了後漢後期的文人夫妻秦嘉、徐淑書信往來的殘卷（《俄藏敦煌文獻》第16冊、敦煌番号、Дｘ12213号）。殘卷包含了以往文本中沒有的詩句，是重新把握秦嘉、徐淑文學特質的非常有價值且意味深厚的資料。

關於《俄藏敦煌文獻》中收載的秦嘉徐淑的書簡殘卷，利用其進行研究的兩篇先行研究論文，分別在2003和2007年發表。但是對于秦嘉、徐淑文學所顯示出的新的側面，兩篇論文都沒有充分論及。

本論文，首先根據敦煌番号、Дｘ12213号、秦嘉、徐淑夫妻的書簡殘卷對以往文獻中收載的夫妻二人的書簡進行校正。在此基礎上，利用《俄藏敦煌文獻》對上述先行研究進行補充完善的同時，還從其它角度對秦嘉、徐淑夫妻詩文的文學價值進行了再檢討。作為結論，從①相互應酬②作品鑒賞及欣賞③作品批評④五言詩創作這四點來看，秦嘉、徐淑的文學活動，已經具備了建安文壇的諸多特徵，可以說在文學史上具有先驅的意義。

此外，筆者認為中間含有“兮”字的徐淑本人的五言體，是四言詩向五言詩發展的過渡形式。而且徐淑的詩被後人評價為有輕快感和流動性，本文對於這種表現特性也進行了若干的再考察。